# ちびっ子士郎の聖杯戦争。

雷雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ちびっ子士郎の聖杯戦争。

【Ｎコード】
Ｎ５０５９Ｐ

【作者名】
雷雨

【あらすじ】
「おねぇさん……だれ？」
最強のサーヴァント・セイバーを召喚したのは衛宮士郎……なのだが、何故か心身共に幼児化してしまった！
笑いあり、ボケあり、たまーに怖いこともあり。
一人の子供から始ったゆるーいハードフルコメディーな聖杯戦争が始るよ。

※基本ほのぼのの趣味まっしぐらの小説になります。

※ご感想をいただいた際、返信がおおいに遅れる場合があります、
ご了承お願いします。

## 予告（前書き）

前に投稿した、「ちびっ子士郎の聖杯戦争。（嘘予告）」を消去しこちらにのせましたものです。

## 予告

「おねぇさん……だれっ？」

「えーと、私のマスター……でいいんですよね？」

「ますたー？それ、何？」

月明りの下、彼は銀色の鎧の少女は目の前で首を傾げる子供に混乱した。

「まさか、衛宮君がマスターだな、……あれっ？」

「赤いおねぇさん、だれっ？」

「シロウ、あれは敵ですよ。」

「てき？」

赤い少女と赤い騎士と直面し。

「何らかの誤差で、その……多分、私のせいです。」

「うっ？赤いおねぇさん、ワルいことしたのか？」

「どうやら、その様ですね。」

全ては赤い少女が行ったことから始まり。

「アーチャん？」

「ぶっ！」

「……アーチャーだ。」

笑いあり。

「喜ぶがいい。お前の望みは漸く叶う。」

「え、それってじいさんがジャンクフードたべるのやめてくれるの？」

「……それとは違う、気がする。」

ボケがあり。

「あれ、お兄ちゃんがちっちゃくなってる…！？」

「うわぁ、セイバー、おっきな人がいるよっ！」

「シロウ、あれはバーサーカーです！」

ロリが出たり。

「ちっこい先輩、ちっこい先輩、ちっこい先輩、ちっこい先輩……」

「セイバー、あのおねぇさんこわいっ！」

たまに怖いこともあり。

「……ボクがコレ着てくれたら……考えてあげる。」

「それ着たら、いいの？」

「士郎ダメよ！あれは女物よ！」

コスプレもあり。（！？）

一人の子供から始ったハードフルコメディーな聖杯戦争が始るよ。

誰得？

俺得っ！

## はじまり。（前書き）

この小説には無垢１００％の士郎さんがメインです、大きい高校生の士郎さんは出ません。

今回はちょいシリアスです。

**はじまり。**

何故こんな場所に居るか、わからず赤毛の少年は首を傾げた。
見覚えのない建物の中で倒れていた身体を起こす、胸の真ん中から身体中が痛く、小さく呻く。

「……っ、」

暫くしてからペタンと尻をついて座り込むと、辺りを見回す。
月明りで照らされた長い廊下に沢山の横に開くドアと反対に沢山の窓……学校？と首を傾げるが何故此所に居るかまったくわからない、それに明らかに身体に合わないベージュ色の上下の服に中に真ん中が赤く染まったて穴が空いた青と白のシャツ。

「……？」

頭が痛い、吐気がする。
無理に立ち上がると眩暈でまた座り込んでしまった。
ピチャ、と跳ねる音に真下を見て見る……

「！？」

血だ。
真っ赤な血溜まりで座り込む自分に慌てて壁側に張り付く。
シン、と静まりかえった長い廊下に荒い息遣いが響き恐怖心で振える身体、膝に顔を埋め頭を抱え目を瞑って蹲る。
なんで？

ここはどこ？

わからない。

怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い……

『――』

「！」

抱えていた頭を上げた、脳裏に写った黒髪の男が優しく笑っていた。

「……、さん」

痛む身体を引きずりながら、近くにあった掃除用具で汚れを落とし身に着けていた服（ズボンや靴）を手に学校を出た。

校門から出ると引きずる様に脚を進める。

此所はどこだか少年にはわからなかった、だが足は勝手に動き続ける。

暫くすると、月明りに照らされた見慣れた道に出た。

家が近い。

優しく笑う男に手をひかれて着いた、二人で住むには広すぎる屋敷。

もうすぐだ。

知らずに足を急がせる。

見えた。

やっと辿り着いた。

安堵し門をくぐったが、あんなに急いでいた足は止まり……違和感を覚える。

屋敷には明かりがついていない。

いや、人の気配がしない。

玄関の戸を開けて、汚れた裸足のまま屋敷に入る。

居間を覗く、いない。

洗面所、いない。

あの人の部屋、いない。

部屋一つ一つを覗くが何処にもいなく、屋敷中を歩き周る。

庭に出て道場も見たが、あの人はいない。

最後に残ったのは土蔵。

重たい扉を開け、月明りに照らされた中を見回したが……やはり、探している人は見つからない。

物静かな屋敷、自分を救ってくれた人がいない。

「じ―……ん」

ボロボロ涙が溢れ座り込むと少年は泣き出した。
悲しくて、哀しくて……ずっと無我夢中で男を呼びながら泣き続けるなか屋敷中に鳴り響く警戒音に少年は気がつかなかった。

ジャリ、

「！」

背後、ちょうど少年の真後ろに感じた気配に振り返った。
そこには、青い鎧に赤い槍を肩に担いだ男が立っていた。

「っかしなぁ、確かに坊主の気配を辿ったはずなんだが……」

男はなんでだぁ、と辺りを見回す。
少年には何がなんだか分からなかった。
誰もいない屋敷に謎の男。
少年はギュッと大き過ぎる服の胸元を握ると後ずさる。

「あー……」

男はガシガシと頭を掻くと、土蔵の中に脚を踏み込む。

「悪いな、見られちまったモンは仕方がねぇ……これも運命だと思って諦めてくれ。」

槍の穂先が胸元に当てる。
そこから先は、死。
なんで。
なんで。
少年は顔を歪めるとボロボロ泣き出す。
「悪ぃ、苦痛なんぞ感じないよう済ませるからな……」
男は少し眉をひそめ、穂先が服を貫いた。
しにたくない、しにたくない、しにたくない…！
あのヒトにたすけられたイノチなのに、ここでシにたくない…！
だれか、たすけて…！

刹那、少年の心の叫びに呼応したのか床に描かれていた魔法陣が光る、男は瞬時に少年から離れる。
「まさか、小僧が七人目だと…！？」
驚愕している男は舌打ちをすると土蔵から外に出ていった。
少年は、今目の辺りにしている光景に呆然としていた。

眩い光が止み目を開けると目の前に立つ、月明りに照らされた青いドレスに銀色の鎧を纏った金髪に碧色の瞳をした物語に出て来る様な騎士の姿をした少女が自分を見下ろしている。

「問おう、貴方が私のマスターですか？」

凛とした声で問われた質問に少年は首を傾げる。

「おねぇさん……だれっ？」

これが、少年（彼）のこれから始る物語の始まりだった。

## はじまり。（後書き）

出来た！！
突発でできたネタがまさかの好評だったので連載をしてみようとおもいます。
投稿はまばらなのでご了承お願いします。
こうしたらどうだ、等のご意見ありましたら是非。
キャラはオールの予定です。

**おねぇさんは、おれのさーばんと。**

「おねぇさん……だれっ？」

最優のサーヴァントであるセイバーは目の前で首を傾げる赤毛の少年を目の前に混乱していた。
サーヴァントを召喚する者は魔術師だが、目の前にいる少年からは微弱な魔力を感じるが魔術師には程遠い一般人に近い。

「えーと、私のマスター……でいいんですよね？」
「ますたー？それ、何？」

舌足らずで首を傾げる少年にセイバーは頭を悩ませた。
回りを見回すが少年以外誰もいない。
だが、背後……土蔵の外に魔力を感じ気を持ち直した

「マスターはここにっ！」
「え、あ……」

少年を背にセイバーは土蔵を出た。

少年には何がなんだかわからなかった。
やっと見知った家に着いたのに、あの人は居なく、知らない男の人に突然現れてますたーではないかと訪ねてきた女の人……
……あ、ケーサツ呼ばなきゃ、ふほーしんにゅうだっけ？とぼんやり考えていたが庭の方から金属音になんだろうと扉まで足を進め、コッソリと覗き込むと目を奪われた。

さっきの男と少女が戦っている。
男は赤い槍で戦っているが少女は何か握っているようだが何かはわからない。
若干だが少女の方が押されている。

「ぁ、……」

少年は身を隠していた扉から外に出て駆け出した。

「だめぇ！」

少年の叫びに男と少女は動きを止め、その間に少年が割って入った。
突然の出来事に二人は固まってしまい少年を見下ろした。

「小僧…？」
「マスター！？いけません、何処かに隠れて――」

「ケンカはだめっ！」

「「……っは？」」

涙目で叫ぶように発した言葉に二人は目を点にした。

「ケンカしちゃだめだよ！ケンカなんかしても痛いだけだし、なにより人を傷つけるんだよ……青いお兄さんも、いいおとなが、おねぇさんみたいな女の人を相手にケンカするなんてなさけないよっ！おとなげないよっ！」
「「……」」

男は言われ放題言われ顔が引き攣る。

「あー、坊主。これはケンカじゃねぇ、サーヴァント同士の戦いだ」

「さーばんと？たたかい？」

「そうだ、坊主もマスターならそれぐらいわかるだろ？」

「……おれ、よくわかんない……でも、たたかうってことはケンカなんだろ？」

「いや、戦いはケンカってわけじゃ……あっー……シケタ」

「え、青いお兄さんかえるの？ふほーしんにゅうしたから？」

「ふほー……セイバー、こいつお前とこのマスターだよな」

「そうなります……」

頭を抱えるセイバーとそれに首を傾げる少年

「今日は引かせてもらうぜ、これ以上いたらお前んとこのマスターに何言われるかわかんねぇし」

相手の返信も聞かぬ内に男は塀を乗り越えて何処かに走り去っていった。

少女は待てと言いかけたが既に相手は去ってしまい、少女と少年が残された。

「あ、あの……」

恐る恐ると口を開き困ったように見上げてくる少年にセイバーは目線を合わせてどうしました、と尋ねれば少年はシュンとしてしまう

……

「もしかしたら、おれじゃました…？」

幻覚か垂れた犬耳が見えたがいやいやと頭を振った。

「そんなことはありませんよ、貴方のおかげでランサーを追い出せました。」

「らんさーん？」

「ランサー、ですよ。さて、気を取り直して……」

「ふぇ？」

「再度問います、貴方が私のマスターですか？」

「……おねぇさん、おれおねぇさんの言っていることよくわからないよ、ますたーってなにっ？」

「……手を、見せてください。」

手を、と首を傾げるが両手を見せると少年はあれ、と見慣れないものが自分の左の手の甲に浮かび上がる赤い刺青のような痕にアワアワと慌てた。

「おねぇさん、なにこれっ！？」

「落ち着いてください、これはマスターである証の令呪です」

「れいじゅ…？」

「はい、では気を取り直し、――――サーヴァント、・セイバー、召喚に従い参上した。これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。――ここに、契約は完了した。」

キン、と手の甲の痕が輝く。

「しょーかん…けーやく？」

「はい、貴方は私を呼び出したマスターの一人です。その令呪がマスターの証しなのです。」
「ますたー……でも、おれはおねぇさんのことよんでないよ。ゆかがピカッーとしたらおねぇさんが居たんだよ」
「それでも私は貴方のサーヴァントとしてここにいる、だから私のマスターは貴方だ。」

納得できないのか頬を膨らませる少年にセイバーは困ったように笑う。

「わかった、おれがおねぇさん……じゃなかった、セイバーさんのますたーになるよ、でもますたーとかあなたじゃなくて士郎ってよんでほしいな」
「シロウ……わかりました、よろしくお願いいたしますね。」
うんと頬を赤らめて頷く士郎にセイバーも自然と微笑んでいた。

**おねぇさんは、おれのさーばんと。（後書き）**

七歳の従弟が戦い＝ケンカと言っていたのを思い出して、ちょっと借りました。

子供にとっては戦争は喧嘩の一種だと思っているのかな…

**あくやくさんとうじょう！…なの？**

「えっと、……セイバー、さん？」
「私のことはセイバーでいいですよシロウ……何か聞きたいことでも？」
「うん、あのね……えっと、ますたーってなにすればいいの？」
「サーヴァントに命令すればいいのですよ」
「さーばんと……青いお兄さんも言っていたけどさーばんとってなに？」
「サーヴァントとは、――――」

突然、ハッとし辺りを見回すセイバーに士郎はどうしたの？と問おうがセイバーはキッと屋敷の塀を睨み付ける。

「シロウ、外に新たなサーヴァントが来ます、貴方は屋敷内に居てください。」
「え、セイバー？」

心配げな声で見上げる士郎を余所にセイバーは一気に塀まで走り、塀を乗り越えって行った。
一人になってしまった士郎は、再び不安になり胸元を握りしめるセイバーは屋敷内に居ろと言っていたが今の士郎には頼れるのはただ一人だけ、……結果は予想通り、門まで裸足のまま駆ける士郎。

「セイバー！」
「なっ…！？」

敵マスターに追い討ちをかけるように自身の武器を突きつけていた

セイバーだが背後の声に振り返れば、自身のマスターである士郎が息をきらしている。

「シロウ…！」

敵マスターなどそっちのけで士郎に駆け寄りどうして来たのか聞けば、黙ったまま振るえる手でセイバーの手を握る。

「ごめんなさい、でも……」

一人にしないで、と言っているかのように振るえて涙目で見上げてくる士郎に垂れた耳と尾の幻覚が見え、不意ながらキュンとしてしまう自分に首をふる。

「セイバー、あの人たち……」

「！」

しまったと士郎を後ろに隠し、放り出した敵マスターに武器を構える。

言うまでもないが敵マスターは不機嫌に腕を組んでいたがフンッと鼻で笑う。

「まさか、衞宮くんがマスターだな、……あれっ？」

敵マスターは着ている赤いコートと反面に真っ青になり上げていた口角を歪め信じられないモノを見るかのようにセイバーの後ろに隠れている士郎に思いっきり首をかしげると屋敷と士郎を何度も見返し唸る。

そんな中、ねぇ、とセイバーの着ているドレスの裾辺りを引く士郎にセイバーはなんでしょうかと聞く。

「赤いおねぇさん、だれっ？」

敵マスターは士郎を知っている様子だが、身に覚えのない人に困った様に眉を下がった士郎にセイバーは暫し悩んだ。
この純真なマスターに現状を捻って言えば場が悪くなる可能性があり。
サーヴァントのマスターで戦闘の途中と言えば、ランサーのとき同様で「ケンカダメッ！」と前に出られては困る。
セイバーは悩んだ末に……

「シロウ、あれは敵ですよ。」

直球に言えば士郎は首をかしげる。

「てき？」
「はい、敵です。」
「てき……」

士郎の脳内に浮かんだ敵のイメージは、黒い身体に二本の角、胸に紫ボタン、矢印の様な尻尾、ギザギザ歯、背中にハエ羽で赤くって空を飛ぶ顔がパンが宿敵な去り際に「バ●バイキ～ン！」と言う国民的アニメキャラが浮かんだ。

ちっ、ちっ、ちっ、……ちーん。

「わるいやつなんだね。」
「はい、悪です。」
「赤いから赤いワルモンだね。」
「はい、赤い悪魔です。」

「誰が悪者じゃごらぁ！！」

乙女……とは程遠い雄叫びが月夜に響いた。

## あくやくさんとうじょう！…なの？（後書き）

今回も短いです。
悪者から連想するものを考え、行きついたのはあのアニメのキャラになりました。
みんな大好きの「ハ～ヒフ～ヘホー！」の子です。
まぁ、いちよあの人はこの回だけ「ワルモノ」キャラです。

**おはなししましょう。**

チッ　チッ　チッ

時計の秒針が暗黙の居間に鳴り響く、その部屋には男が一人、女が二人、子供が一人……それぞれ違う表情を浮かべているいる。男は複雑そうな…微妙な顔をし、黒髪の少女は頭を抱え唸り続けいる、金髪の少女は前に座っている男女を警戒している、子供の方は困惑したように三人の顔を見回している。

「誰が悪者じゃごらぁ！！」

「ふぇっ！？」

ビクッと肩を跳ね上がる士郎はセイバーの後ろにサッと隠れる。

「ぁ、えっと」

我に返り、金髪の少女の背後で振るえる子供に流石に焦り、戸惑った。

「えっと、ごめんなさい衛宮君、でいいのかしら？」

「……そうだよ、おれが、えみやだけど……でも、」

キュッと裾を掴む手を放し、数歩前に出ると困ったように眉を八の字にして胸元に手をやる。

「おれ、赤いおねぇさんのこと知らないよ……今日が、はじめまし

てだよ。」

言い切る前にサッとセイバーの背後に隠れる士郎に凛はなっ、と固まってしまう。
それを見た士郎はセイバーの裾を引く。

「セイバー、おれなんか悪いこと言ったかな？」
「いえ、そんなことはありませんよ。」

ふわりと微笑むセイバーに士郎はそっかと安心をした。

「こら―！そこっ！和むなっ！」

シャー、と逆毛をたてた猫のように怒りだす少女。
だがそんな少女の肩をつかむ者がいた

「凛、落ち着くんだ。」
「アーチャー……」

少女の肩をつかんだのは褐色の肌に白髪の変わった服装の男だ。
突然現れた男に士郎は、驚き無意識に裾を握りしめるとセイバーが大丈夫ですと言い聞かすとうん、と頷く。

「凛、一度落ち着くんだ。」
「わ、わかってるわよ……ちょっと現状が把握できてなくって」
「ふむ、……」

チラリと士郎を見る男、すかさずセイバーが背後に隠す。
男は少し考え少女に声をかける。

「凛、任せてくれないか。」
「え、でもアンタ負傷して……」
「戦いはしない、少し話がしたいだけだ……凛もあの子供が気になるんだろ？」
「……わかった、任せる。」

少女は一歩下がると男はセイバーと向き合った。
だが、目線は若干下向きで、背後にいる士郎を見ている。

「ところで君。」
「ふぇ、……おれ？」
「あぁ、君にひとつ聞きたいんだが……もしや、それ一枚しか着てないのか」
「へっ？」

首をかしげ、着ている服を見る。

「……くしゅん。」

タイミングよく、士郎はくしゃみをした。
そう、現在士郎の着衣はブカブカのシャツ（胸元穴あき）一枚。
もちろん、ノーパンだ。

「そこでだ、……ここは一時休戦し……そうだな、君の家に入れてもらえないだろうか？」
「なんだと…？」
「君も自身のマスターがこんな寒空の下で寒々しいてかっこうしているんだ、風邪でも引かれては君が困るだろう。」
「う、……しかし」
「セイバー」

「シロウ？」
「えっと、あの人もさーばんとなの？」
「はい、そうですよ」
「そっか……あの赤いお兄さん、いちじきゅーせんって、よくわかんないけど、ケンカしないってこと？」
「喧嘩？……あぁ、少し話がしたいんだ、だから場を移したいんだ。」
「……セイバー、あの人たち、家に入れていい？」
「それは、マスターであるシロウが決めることですよ。しかし、よろしいのですか」
「うん、音ならなかったから大丈夫だよ。」
いいでしょ、と聞いてくる士郎にセイバーはわかりましたと答える。

そして、今にあたる。

居間は沈黙が続き、机に置かれた湯飲み（士郎が茶っぱを入れ、男が湯を入れて湯飲みに入れた。）が湯気をたてていた。

## おはなししましょう。（後書き）

み、短い…！

そして、進まない話の内容。
意外と本編通りに進めるか難しいです。
次回、赤主従にたくさん喋ってもらいます。
そして、今更ながら「子シロウってシャツ一枚じゃねぇかっ！？」
っと気づき、そこらへんを追加しました。
次回辺りから衣装チェンジしとかないと…

## 番外編　ばれたでー。（前書き）

※この話は聖杯戦争後設定です。

●注意書き●

1．子シロウは、凛と桜を「姉さん」と呼んでいます。

2．アーチャーがちょっとですが父性に目覚めてます。

3．皆仲良し。

OKならどうぞ。

## 番外編　ばれたでー。

「はい、シロ君」
「？」

八百屋のおかみさんに手渡されたのは、手のひらに乗る正方形の小さな包み。
それを受け取った士郎は首をかしげた。

「セイバー、リン姉さん、サクラ姉さん、イリヤ姉さん、ライダー！」

お使いに行っていた士郎があわてて帰ってきた。
片手にはお使いの品であるキャベツが入った袋。
どうかしたのか慌てる女性陣に対し士郎はあのね、と口を開く。

「今日、ばれたんでーなの？」
「「……はっ？」」
「バレた？」
「何がバレた日なんですか？」
「変わった日本の行事ですか？」

目を点にする姉妹と首をかしげるイリヤと話し合うセイバーとライダー

「士郎、もしかしてバレンタインのこと？」

「そうっ！あのね、やおやさんのおばさんがチョコくれたんだ、なんでくれたのか聞いたらね、今日はばれたんデーでいつもお世話になっている人にチョコあげる日だって言ってたんだ。」
「ほぅ、チョコをですか。」
「うん、でもね……おれ、みんなにあげるチョコ買うお金なくって、買えなかったんだ。」

シュン、と幻覚の耳が垂れたように落ち込む士郎にキュンときたセイバーは主を抱きしめる。

「シロウ、貴方のその気持ちだけで十分ですよ。」
「セイバー、苦しいよ―」

美しき主従愛が続き、やっと士郎が解放されるとあっ、と何かを思いだして凛らに向かってあのね、と言う。

「帰り道にランさんに会って教えてもらったんだ、あのね」

両手を向き合わせ前に出し、指を曲げる指先を合わせると、

「ラブちゅ―にゅう！」

満面の笑みを浮かべ両手でハートをつくる士郎。

ドサッ

「きゃ―！桜っ、桜―――！」
「衛生兵―！誰か衛生兵をっ！」
「先輩のラブ、先輩のラブ…うふふかわいいです…」

慌てる姉と従者と幸せそうに倒れる妹、若干だが赤いものが見えた

「？サクラ姉さんどうしたの？」
「大丈夫よ、いつものことだから」
「シロウは気にしなくて大丈夫ですよ。」

セイバーに抱き抱えられイリヤの持参した洋菓子を受け取った士郎はそうなの？と首をかしげた。

☆★

「士郎、一つ聞きたいのだが。」
「なに、アチャ兄」
「……この花はどうしたんだ？」
「あ、あのね、帰ってくる途中にランさんに会って、アチャ兄になにか送りたいって言ったらこれをやればいいってくれたんだっ！……もしかして、お花…嫌い？」
「いや、そんなことはない……ありがとう。大事にするよ。」
「えへへ」

頭を撫でられ嬉しそうな士郎に、つられて微笑むすっかり父性（母性？）に目覚めた褐色肌の弓兵は内心、あの駄犬殺す。と決めていた。

## 番外編　ばれたでー。（後書き）

子シロウが貰ったのはチ●ルチョコです。

アチャが貰ったのはカーネーションです（笑）

きっと、ドライフラワーにして取っとくと思う。アチャだし。

あ、ランさんとは槍のことです。

## おはなししましょう。　その２（前書き）

※１２／１５・編集。

## おはなししましょう。　その2

無言の圧迫感と長い沈黙に耐えられなかったのは士郎は恐る恐る口を開く。

「あの、」

六つの瞳が士郎を見る。
ビクッと肩が跳ね上がるが、おずおずと口を開く

「あの、その……赤いおねぇさん」
「……凜よ」
「へっ？」
「私の名前、遠坂凜……よろしくね。」
「とーさか、りん…うん、わかった、リンさんだね……よろしくお願いします。」
「……それで、一つ聞きたいことがあるんだけど」
「え、…なに？」

首を傾げる士郎に凜は言いにくそうに問いかける。

「貴方、さっき私とは初めて会ったって言ったわよね。」
「うん」
「……一様、聞くけど貴方、今何歳？」
「えっと……たぶん七歳。」
「なっ…！？」

凜の隣の男が驚愕で声を漏らすが、何でもないと視線を逸らす。

「そう、なの……衛宮君、落ち着いて聞いてくれる？」
「リンさん？」
「信じられないかもしれないけど……貴方、私と同い年なのよ。」
「えっ？おないどし？」
「貴方、ほんとは１７歳で私と同じ高校に通っていたの」
「えっ？……えっと、おれとリンさんは同じとしでどうきゅうせい？」
「えぇ」
「……えっ―！」

そうなのっ！？、と混乱しだした士郎、苦い顔をした凜、驚愕の事実を知ったセイバーは凜に問いかけた。

「リン、もしやと思いますが、シロウのこの姿になった事で何か知ってますね」
「うっ」

ジト目で睨むセイバーと不安そうな士郎……凜は重い口を開く。

「実は……衛宮君は私達と対峙していた青い鎧のサーヴァントに襲われたの。」
「青いよろい…えっと…ランさんのこと？」
「ラン、さん…？」
「恐らくランサーの事でしょう」
「あ―、なるほど。それで衛宮君は襲われて瀕死の状態だったの」
「ひんし…？」
「死にかけ、て事。それを見つけた私が蘇生の魔術を使ったの」
「そせい？」
「生き返らせる事。よ……それで私らはその場を離れたんだけど……その、その時の、何らかの誤差で、その……多分、私のせい

です。」

すみません、と項垂れる凛に士郎は首を傾げる。

「うっ？リンさん、ワルいことしたのか？」

「どうやら、その様ですね。」

「やっぱり、赤いワルモノなんだ。」

「赤い悪魔ですね。」

「違うわぁ―！！」

ウガッ、と卓袱台返ししそうな行きよいで唸る凛。

ヒッと肩が跳ねる士郎はセイバーにひがみつく、男は凛を宥める。

「えっと、おにぃさんのお名前は？」

「私か？私はアーチャーだ。」

「アーチャん？」

「ぶっ！」

お茶を吹く凛は笑いを堪えた。

眉をひそめる男は咳払いをする。

「……アーチャーだ。」

「あーちゃー…アーチャーさん？」

「呼びやすいように呼べばいい」

「じゃ、アチャさんで良い？」

「……良いだろう。」

「それから一様、聞きたいんだけど、何か覚えている事ある？こう…鮮麗に覚えている事とか？」

「え、……ぁ、…」
「シロウ？」
突然俯いた士郎だが、直ぐに頭を上げる。
「おれがじいさんに引き取られたことかな、一番に覚えているの。」
「えっ？」
頭を上げた士郎は淡々とした口で答えた。
しかし、その目は薄暗い闇が浮かんでいる。
「前におっきな火災があって、そのときにおれ、家族とかよく思い出せなくって、病院にいた時にじいさんが来て、おれをよーし子にしたんだ。その時に……じいさんが言っていたんだけど、今日から君はボクの子で衛宮士郎って名乗るんだよ、て言ってた。……今はそのくらいしか今は、思い出せない」
ごめんなさい、とシュンとした士郎、その瞳には闇はなかった。
落ち込む士郎にセイバーは頭を撫でた。
「それじゃ、衛宮君はその人に引き取られてからの記憶しか思い出せないの？」
「うん、でも引き取られた後のちょっとの間くらいの事は思い出せるよ。」
「そう、……それにしても、驚いたわ……まさか衛宮君がセイバーを喚び出してしまうなんて」
「え？…違うよ、よんでないよ、ゆかが光ってセイバーが居たんだよ。」
「はッ？……何それ、セイバー…本当なの？」
「はい、確かに私は参上しましたが、シロウは喚んでいないと申し

ています……しかし、シロウは令呪を持っていましたので、形はどうあれは私はシロウのサーヴァントでシロウは私のマスターであります。」

胸に手をあて、士郎の肩に手を回し微笑むセイバーに士郎もうん、と笑い微笑ましい雰囲気になるがハッとした士郎はセイバーの膝に手をおく。

「そうだっ！セイバー、さーばんとって何っ？話きいてないよ。」

「あら、それなら私から説明しましょうか？」

凛の言葉に士郎は本当に？と首を傾げる。

セイバーはムッとしたように眉をひそめる。

## おはなしして、じゅんぴをする。（前書き）

約九か月放置していました。
今年最後の投稿になるかも…

**おはなしして、じゅんぴをする。**

凜の話をうんうんと頷きながら聞く士郎だが、所々でわからなくなり首を傾げると凜が分かりやすく説明をする。

「えっと、さーばんとはセイハイによってよばれて……それからさーばんとは七つあって……えっと、ますたーも七人いて……それから……」

指を折りながらも必死にまとめるがこんがらがって混乱する士郎にセイバーは心配そうにしている。

「え―っと、……衛宮君に分かりやすく言い換えれば、サーヴァントって言う犬の人が七匹居て、それぞれ特技な事があって、剣が得意な犬、弓が得意な犬、槍が得意な犬、乗り物に乗るのが得意な犬、魔法が得意な犬、……隠れるのが得意な犬、暴れる事が得意な犬が居る。それぞれには飼い主がいるこれがマスター、それで七匹が競って、残った一匹が聖杯って優勝を獲得出来るの。」

「え……セイバーって犬なの？」

「……例えよ、例え。セイバーは犬じゃなくて英霊よ。」

「え―れい？」

「え―と、……昔に活躍した英雄の霊のことよ……そうね、衛宮君から見ると……ド●ゴン●ールの悟●みたいなものかしら。」

士郎の脳裏に『オスッ！オラ悟●。』と笑う青年が過ぎ去った。

「す、スゴいっ！！セイバーカッコいい！！」

「え、あ、はい？」

「サイヤ人になれるの？」

「さいや、ジン？」

キラキラした眼差しで見つめられ困惑したセイバー。

大体の話を終えると士郎はそうなんだぁ、と納得すると凛が立ち上がる。

「それじゃ、セイバー良いかしら？」

「ええ、行きましょう」

「え？」

立ち上がった二人を見上げ、首を傾げる士郎。

「衛宮君は暫くの間は家で辛抱してあとはセイバーに任せればいいから…もちろん、原因となってしまた責任持って私も手助けするから」

「？……どうゆうこと？」

「君は家でお留守番している間、私とセイバーでなんとかするってことよ」

「……やだ」

「シロウ？」

「やだ、おれも行く。」

「しかし、シロウ。あなたには危険すぎる、貴方の今の身体では聖杯戦争を勝ち抜くことか足手まといです…。どうか此処で留まってください。」

お願いします、と膝を折り小さな主に言い聞かせるが士郎は唇を噛

みしめ首をふる。

「邪魔はしない。良い子にしている…だから、」

ひとりぼっちにしないで…。

スンスン、と鼻をならし今にも零れそうなほど涙をためて見上げる士郎にセイバーは胸を締め付けられるように苦しくなる。目を閉じ、再び目を開けると士郎に微笑む。

「わかりました。共に行きましょう。」

「え…？」

「ちょっと、セイバー！？」

「ただし、幾つか条件…、約束をしてください。」

「う、うんっ」

「一つ、一人で勝手な行動はしない。

二つ、私の傍から離れない。

三つ、戦闘になったら物陰に隠れるか凛の傍に居ること。

…いいですね？」

「うん、セイバーとリンさんからはなれなかったら良いだね。」

一つ一つ確認する士郎は頷く。

「リンも構いませんね。」

「あーもー、好きなしなさい」

「リンさん、ありがとう。…それじゃ、おれ着替えないとっ！！」

パタパタと居間を出る士郎をセイバーが追う。

凛ははーっとため息を付くと今まで沈黙していたアーチャーが口を

開く。

「良かったのか？」

「しかたないでしょ、今の衛宮君にとってセイバーが唯一の信用出来る存在なんだから…まぁ、最低限のことはするつもり。」

「そうか…」

「それに、」

「？」

「形は違うけど、セイバーを手中にしたようなものだし…」

「……凛、君はつくづく意地が悪いな」

グへへっと笑う凛にアーチャーは頭が痛くなった。

今この場に士郎が居たら間違いなく「赤いワルモノが居るっ！」っと叫ぶだろう。

＊＊＊

士郎のあとを付いて行ったいったセイバーは士郎の部屋らしき部屋で士郎が衣装箪笥を探っているのを見ていた。

「うー、全部おっきいや」

箪笥には今の士郎では大きすぎるシャツやジーパンしか入っていない。

「やっぱり、おれ１７歳だったんだ……」

悲しげにシャツを握るがフルフルと首をふり、気を持ち直すとセイバーの方を向く。

「どうしよう、ここにはおれが着れそうなのないや」
「困りましたね。…どこか違う所に置いてあるのでは？」
「ちがう所？…うーん、もしかしたら土蔵にあるかもしれない…行ってみよう。」
「はい」

土蔵に入ると上の階に続く梯子を上り、辺りを見回す。

「あった」

土蔵の片隅に置かれた葛籠の中には子供用の衣類が入っている。
だが、どれも今の士郎より少し大きい。
仕方なく違う葛籠を開けるとそこには紺藍色の着物が入っている。

「んー、これでいいかな…」
「それ一枚ですか？」
「そうだなぁ…上に着ないとはさむいからなぁ、セイバー、コートを探してくれる？」
「はい、わかりました。」

セイバーが外套を探している間、士郎はブカブカの服を脱ぎ、着物を着る。
え、なんで着れるかって？
身体が覚えていたんだよ、きっと。

セイバーは葛籠の中で外套を捜索中、厚手の黄色いのに目がいった。
おそるおそる取り出し広げると…
歓喜に手が震えた。

「セイバー、あった？」

着終えた士郎が振り返るとセイバーが黄色いのを握ってキラキラした目で士郎を見つめていた。
士郎は首を傾げると黄色いのに視線を向けるとキョトン、とした顔をする。

「セイバー、それ？」

コクコク

「むー、ちょっと子供っぽいけど…セイバーが探しれくれたんだから着るよ。」

数分後、居間に戻ってきた二人に凛はふき出し、アーチャーに至っては固まっている。

「リンさん、どう？へんかな？」

紺藍色の着物に膝下までである黄色いコート。
そのコートがある動物をモチーフにされているのが凛のツボになったらしくグッと親指を出してくっくっくっと腹を抱えて笑っている。

いたって普通のファーの付いたコートだが、フードを被ればそこには三角の耳が付いている、被ったことによりファーは鬣の様になる。
後ろのコートに裾には長い尾に先の様にはファーと同じ毛がついている。
士郎が着衣しているのはライオンをモチーフにした一動物外套≪ア

ニマルコート≫だった。

「シロウ、よく似合っていますっ！！」

「そうかな？…でも、セイバーが選んでくれたから良いんだね。」

にこにこ笑う二人を目の前にアーチャーは重いため息をつき、古い記憶で誰かが黄色いコートを手にしている姿を見た。

**おはなしして、じゅんぴをする。（後書き）**

※裏設定。ライオンコートは実は切嗣さんの力作。

子士郎、ようやく着替えました。

次回から女子高校生と子供とサーヴァント二体で教会に行きます。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5059p/

---

ちびっ子士郎の聖杯戦争。

2011年12月15日02時34分発行